

20250106

ここ半年ほどのあいだに、広い意味でもものの考え方に関わりのある新書本を3冊読んだ。といっても、ごく広い意味での共通性があるにとどまり、それぞれの本の個性は大きく異なるが、とにかくものを考えるとはどういうことかについて、いろいろと考えさせられた。読んだ順に並べると、

①佐藤卓己『あいまいさに耐える——ネガティブ・リテラシーのすすめ』（岩波新書、2024年）。

②今井むつみ『学力喪失——認知科学による回復への道筋』（岩波新書、2024年）。

③渡邊雅子『論理的思考とは何か』（岩波新書、2024年）。

これらのうち、最も充実感を覚えたのは今井の②である。「学力喪失」というタイトルだけを見ると、学校生徒の学力が落ちていて何とかしなくてはならないといった問題意識の本ではないかという錯覚を招きかねないが、実は、問題なのは子供よりも大人の方であり、「学力」という語の内実が問題だとされている。認知科学に基づく立論を要約するのは容易ではないが、とにかく人間がどうやって「学ぶ力」を付けていくのかが論じられている。同じ著者の秋田喜美との共著『言語の本質——ことばはどう生まれ、進化したか』（中公新書、2023年）を以前に読んでいたので、「アブダクション」とか「記号接地」といった概念にある程度馴染みがあり、それが理解を助けてくれた。

渡邊の③は「論理的」と見なされる思考法が単一ではないことを示し、異なる目的と異なる領域では異なる思考法を選ぶことができるという議論を提起している。興味深い本であり、全体として説得力があると感じた。もっとも、論の運びがやや単純明快で割り切れすぎている観があり、その点に多少の物足りなさを覚えた。

佐藤の①も興味深い論を展開しているが、やや平板ではないかという印象を覚えてしまった。「輿論」と「世論」を区別すべきだというのは著者のかねてからの持論であり、それ自体に異論はないが、本書でのまとめ方には疑問の余地がある。輿論は熟議の産物だが、熟議を経ていろんな意見に到達する人がいることを思えば、輿論は一つではないはずである。ところが、佐藤は特定の意見を輿論と見なす傾向があるように見える。そして、輿論は良いもの、世論は悪いものという価値判断がかなりはっきりと盛り込まれている。私はかつて同じ著者の『八月十五日の神話』（ちくま新書、2005年）、『輿論と世論』（新潮選書、2008年）、『ファシスト的公共性』（岩波書店、2018年）や、ジョージ・モッセの訳書を読んだことがあり、どちらかという好感をいだいていたのだが、本書はやや落胆させられてしまった。

20250114

一昨日（12日）、東大本郷キャンパスで、「長崎浩と「叛乱論」の半世紀」という催しがあった。長崎は60年安保以来、長きにわたって各種社会運動にコミットし、多数の著作を書いてきた人だが、私は彼と直接の接触がなかったばかりか、その著作を読むこともほとんどしてこなかった。その意味でかなり遠い関係だが、多くの人の関心を集めているらしかったので、「ものは試し」で出かけてみた。

4人の提題者をそろえた企画だったが、冒頭で長崎自身の簡単な発言があった。彼は60年安保および68年の運動との関連で、69年に『叛乱論』、71年に『結社の技術』、77年

に『政治の現象学』を出した。しかし、その後、68 年運動が後退するなかで、80 年代にはほとんど何も書かなかった。その後、新たに環境論、気候変化などについて書くようになり（彼は元来は理系の研究者）、更に「歴史としての 1968 年」に取り組むようになった。本人がこうした経緯を振り返る発言をしてくれたおかげで、長崎がどういう軌跡を歩んできたかがある程度分かるようになった。

提題者たちのうち、最初に発言した王寺賢太は、『消え去る立法者——フランス啓蒙思想における政治と歴史』（名古屋大学出版会、2023 年）という本で有名だが、18 世紀フランス啓蒙思想の研究者であるだけでなく、現代的状況についても X（Twitter）で盛んに発言している。古い歴史の研究と現代思想とをどう結びつけているのかがよく分からないのだが、この日の彼の発言は、あらかじめ作成した原稿をゆっくりとした口調で読み上げたので、分かりやすく聴くことができた。話の主な内容は 60 年安保後の情勢に力点をおくもので、多くの部分は納得のいくものだったが、ところどころに飛躍があり、そのため肝心の「叛乱」をどう理解してよいのかに戸惑いを覚えた。

2 人目に発言した笠井潔は数多くの本を書いている作家・思想家・評論家で、知名度も高いが、私はこれまでほとんど読んでこなかった。唯一読んだ『テロルの現象学』は観念的な感じがして、あまりピンとこなかった。彼は私と同年代で、もともと構造改革派系の共産主義者労働者党に属していたが、早い時期に離脱した。当日の発言によれば、ルカーチの『歴史と階級意識』に大きな衝撃を受け、ルカーチ主義者になったとのことだが、私の解釈ではルカーチの同書はレーニン主義を哲学的に純化するもので、これが「マルクス葬送」論とつながるのはよく理解できない。また、長崎の『政治の現象学』に違和感を覚えたとのことだが、そのように異なる見地に立ちながら、長崎と提携してきた——「叛乱論研究会」という会を長崎とともに担ってきたらしい——のも理解しにくい（当日の総合討論では、王寺が笠井と長崎の違いに言及し、長崎とのあいだでもある程度の応酬があった）。

3 番目の廣瀬純は映画批評や哲学的ジャーナリズムを専門としているとのことで、当日の発言者のうち、私と最も縁遠い関係にあった。彼は「尾根、テクニク、スタイル」と題する報告を行なったが、これについては私は感想を述べる資格がない。

最後に登壇した市田良彦は、相当異色の人だという印象をいだいた。私の事前知識は、「俺が党だ」——ポスト〈68 年〉の理論的悲哀（『情況』2018 年秋）という論文を読んだだけだが、これは 1979 年（つまり、学生運動がかつての高揚時から遠ざかり、沈滞していた時期）に、一人だけで京大から東大キャンパスに乗り込み、暴力革命をアジったり、「党派闘争」を展開したりしたことを回想したものだった。何とも突拍子もない文章だという印象をいだいたが、そういう人が後に学者になったのはどうしてだろうかという疑問が残った。当日の報告は、1977 年に自分はアジテーターだったが革命はなかったと述べ、革命は常にあるというローザ・ルクセンブルクを引用する長崎との世代差を実感したと語った。そこには、20 歳の年齢差（長崎は 1937 年、市田は 57 年生まれ）が関係しており、自分は 1960 年も 68 年も経験していないと述べた。このように自分の経験を明白なものとし、長崎との世代差を明示する語り方は興味深いものと感じられた。当日のシンポジウムは 87 歳の長崎をさまざまな世代の人たち（50 前後から 70 代まで）が囲むものだったが、その世代差をどう捉えるかはほとんど語られなかった。世代がすべてを決定するわけでは

もちろんないが、どのような出来事をどのように体験するかが世代によって異なる以上、その差異を踏まえつつ対話しようと努めることが必要だろう。当日、この問題に触れたのは市田だけだった。彼の体験自体は私の理解を超えるところがあるが、とにかくその点を明示し、世代差を踏まえた挑戦を突きつけようとする態度には、思いがけず共感するところがあった。市田は続けて「叛乱」と「反乱」の区別に触れ、前者は近代に対するものだが、後者は近代に限られない古代以来のものであるとして、叛乱は終わったが反乱は続いているという考えを述べた。この考えそのものはよく理解できないが、とにかく長崎に対して問題を突きつけようとする態度であるように思われた。

論者たちの発言が終わった後の総合討論では種々の論点に触れられたが、長崎の最新著『他力という力——叛乱論終章』が神や宗教への言及を含んでいるという発言が興味を引いた。それ自体は分かるような気がするが、それを殊更に「叛乱」と結びつける必然性もないのではないかという気がした。

全体として、私の通じていない領域に関わる議論が多く、よく理解できたとはいえないが、とにかくいくつかの興味深い発言を聞くことができ、刺激的な体験ではあった。

20250119

マーシャ・ゲッセン『ロシア 奪われた未来——ソ連崩壊後の四半世紀を生きる』（白水社、2023 年）という本を読んだ。どう受けとめてよいか迷う書物である。一面からいえば、ロシア出身の知識人による大著であり、種々の現象を詳しく描きだして、現代ロシアを批判的に捉えた書物として示唆的な本と見ることもできる。他面、記述や評価の仕方がかなり一面的であり、ある部分が細かい一方、関連する重要事象を無視したりしていて、これでもって現代ロシア論とするのは相当危うい観があるようにも思える。材料として大勢の人物を登場させ、また各種世論調査データを紹介したりしていて、あたかも多面的な描写をしているかに見えるが、よく読むと、多くの個所は善玉悪玉的に割り切られた書き方になっている。最大の悪玉たるドゥーギンはプーチン政権の重要なイデオログと見なされている（この位置づけには異論がある）一方、最大の善玉はアレクサンドル・ヤコヴレフおよびボリス・ネムツォフとされている。世論調査研究の代表者たるレヴァダ（2006 年死去）の後継者とされるグドコフ（グトコフ）は現代ロシアを全体主義の再生と見なしているが、これは社会学者の大勢を代表しているわけではないにもかかわらず、そういうものであるかのように描かれている。取り上げられている多種の主題のうち、特に大きな比重を割り当てられているのはセックスとりわけ同性愛であり、これはこれで興味深い面があるが、プーチン政権が同性愛を迫害する一方、ウクライナは寛容だという整理には疑問の余地がある（あまり広く知られていないが、ウクライナにも極右勢力がおり、彼らは同性愛を激しく攻撃している）。エリツィンは必ずしも一貫した改革派ではなく、急進派から距離を置くようになったことが指摘されているが、後の方では、民主主義からの離反はプーチン時代に確定したという捉え方が基調をなしている。個別的な例として、ある登場人物の先祖に、有名な歴史家アンナ・パンクラトワがいるが、彼女はもっぱら当局に忠誠を尽くし、異論を疑われた夫を見捨てたという風に描き出されている。この点についても疑問の余地がある。

現代ロシアの知識人——それも祖国に安住することができず、アメリカに出国した人たち

——の中に、本書で描かれたような見地をいただく人がいることは確かであり、そのことが本書に一定の説得性を付与している。しかし、それはあくまでも一部にそういう人がいるということであって、本書がロシア社会全体を正確に描き出しているわけではない。現代ロシアに批判すべきマイナス面があるのは確かだが、本書における描写はかなり皮相であるため、深層に届いた批判ではないという印象を受ける。

20250212

先週末（8日）、いまや3周年を迎えようとしているウクライナ戦争に関するオンライン討論会が開かれた。報告者たち（和田春樹、伊東孝之、松里公孝の3氏）はそれぞれに異なった角度からの議論を披瀝し、多彩で熱のこもった討論となった。

先ず和田春樹氏は、この世界で正義を実現しうる主体は存在しないので、「公正な停戦」を得ることはできないということから出発した。そして、領土も社会体制も人間の命に比べれば第2義的だとして、戦争をやめることの重要性を主張した。ここまではわりとリアルな感じがしたが、トランプの当選は彼が早期停戦を掲げたことへの米国民の支持によるもので、歓迎すべきだというのは、思い入れが過ぎるのではないかという気がした。トランプの政策はパレスチナ戦争については支持できないが、ウクライナ戦争の停戦については実現して欲しいというのも、主観的願望を提示したもののように思われる（平和を願う諸国民はトランプ大統領を助けなければならないとも言っていた）。和田氏はこれに続いて、軍事境界線の引き方、日本を含む中立国による停戦監視部隊の創設、ウクライナにとっての安全保障措置（NATO加盟を含む）、停戦後の国際会議などについて触れ、最後に、ロシアがウクライナ侵略を始めた動機の解釈として、①ウクライナ独立への反対、②NATO拡大への反撃の二つを挙げ、①なら停戦が受け入れられるが、②では受け入れられないと論じた。しかし、あり得べき解釈はこの二つだけではないし、どちらの方が停戦と結びつくかというのも恣意的な議論である。この結論部には同意できない。

伊東孝之氏はウクライナの新聞を3年間読んできた経験に基づいて、両国の戦争目的の変遷、両国の損失数（死者と重傷者の合計）、戦争継続に関するウクライナ世論の変化という3点について論じた。どれも豊富な情報に基づく綿密な議論だった（但し、ウクライナの戦争目的は、当初は開戦時の境界線まで押し返すことにとどまり、1991年時の境界まで押し戻すというのは少し後に有力になったのではないと思われる）。特に重要だと感じたのは第3点である。伊東氏は従来、和田氏の即時停戦論に疑義を呈してきたが、その理由は、ウクライナ人が侵略に抵抗する意志を持つ限りは、外部の人間が戦いをやめよと言ふべきではないという点にあった。ところが、各種世論調査を総合すると、「交渉を望む」という人が次第に増大して過半に達する一方、どれだけの期間耐えるかという問いに「無期限」と答える人はだんだん下がっており、平和のために領土を譲ってもよいという回答が増えている。現にウクライナ人自身が戦闘継続の意志を失うなら、外から「戦い続けよ」と呼びかけることには意味がなくなる。ウクライナはこれまで十分戦ってきており、それは称えるべきだが、今や停戦の時だというのが結論である。こうして、これまで和田氏と立場を異にしてきた伊東氏が、いまやウクライナ世論の変化に応じて停戦賛成派に転じたように見える。もっとも、和田氏が即時停戦を第一義としてトランプをも利用しようとするのに対して、伊東氏はむしろウクライナの世論を重視するという点では、なお開き

があるのかもしれない。私見では、ウクライナの世論が戦争継続一本槍でなくなっているのは事実だろうが、そこから先どうなるのかはなお不確定ということではないかと思われる。

松里公孝氏は「アメリカ大統領選挙と露ウ停戦の見通し」と題して、アメリカを中心とする国際政治の観点からの報告を行なった。2000-01年にアメリカがABM条約を脱退したのに対抗して、ロシアは2018年に極超音速大陸間弾道弾開発に成功した。アメリカがこれに立ち遅れる状況の中でウクライナ戦争が始まり、アメリカはNATOをロシアの国境ぎりぎりまで接近させて中距離核ミサイルでロシアの政策中枢を無力化するという対応をとった。プーチンはアメリカに、ウクライナをNATOに入れないという約束を要求した。このときバイデン政権が「ウクライナをNATOに入れない」と書面で約束していれば露ウ戦争はなかったかもしれない、その時点でトランプが大統領だったらこの約束に応じただろう、と松里氏は主張した。松里氏は次いで、露ウ戦争開戦時のウクライナでは戦意はきわめて高く、ロシアでは厭戦気分が強かったが、3年間でそれが逆転してしまったと指摘した。さらに、露ウ停戦の深刻な障害になっているのは、通常は停戦成立後の和平交渉で話し合われるべき問題を停戦交渉の前提にしようとする傾向が両国ともにあり、出口と入り口が混同されていると指摘した。2025年にトランプが大統領に就任すると、「まず停戦、それからウクライナで大統領選挙、その後、長期的な和平のための交渉」というロードマップが提示された。世論調査によれば、ゼレンスキーの支持率はザルジヌィ、ブダノフに次いで第3位なので、この提案はゼレンスキーに不利である一方、ロシアはこれを歓迎しており、少し前までの態度をやわらげているという。こうして、「まず停戦、それから和平交渉」という戦時外交の常道が回復されつつあるというのが結論である。私は外交上の駆け引きには通じておらず、この報告の妥当性について論評することはできないが、あまり知られていない大量の情報に基づいた野心的かつ刺激的な報告だった。

3つの報告の後の討論では、東郷和彦、首藤信彦、古矢旬といった各氏から多彩な論点が出された。2022年3-4月のイスタンブール合意が不調に終わった理由、日本のとるべき対応（日本はウクライナ援助で世界第3位）、またトランプ政権の信頼性の低さ（彼の仲裁に期待しすぎるものの問題性）などが議論された。私は上に紹介した伊東報告の結論部に関連して、たしかにウクライナで継戦意欲低下が見られるのは事実だろうが、ロシアもいつまで戦時体制を続けられるのだろうかという質問を出してみた。フェイスブックで赤尾光春氏は、あと2年もすればプーチン体制は崩壊するので、ウクライナはそれまで戦い続けるべきだという主張を紹介し、池田嘉郎氏はこれに心情的共鳴を表明していた。この議論の当否はさておき、とにかくロシアの戦闘継続能力に限界があるとすれば、どのくらいかという問いである。この質問に対して、ロシアはそろそろ戦争継続の限界に近づいているという観測が出される一方、ロシア経済が破綻してプーチン体制が崩壊するというシナリオが確定しているわけではなく、ウクライナが犠牲を払って戦い続けるべきだなどとは言えないという意見も出された。

たくさんの意見が出されて、收拾のつかない議論という観もあったが、とにかく刺激的な討論会だった。

20250217

クリシャン・クマー『帝国——その世界史的考察』（岩波書店、2024 年）という本を読んだ。比較的薄い本だが、限られたページ数のなかで古今東西の帝国を相当程度網羅的に取り上げて概説している。その際、そもそも古今東西の帝国を一個の対象として論じることができるかという問題があるが、多様性の中にも「家族的類似」——特に目立つ点として、多様な民族や土地に対する支配——があるとしている。洋の東西という観点から言うと、ラテン語の *imperium* に由来する「帝国」（英語では *empire*）の観念を持つのはヨーロッパだけだが、非ヨーロッパ世界についても、何らかの相似性や共通の意味（家族的類似性）を追求することはできる。西洋の語彙は 19 世紀末には世界中に拡大し、非ヨーロッパの当事者も使うようになったし、それ以前にさかのぼっても、ローマ帝国と中華帝国は相互に交流していた。時代的变化については、2 つの分水嶺により古代、古典古代、近代と分けられるが、その間に継承もあった、というのが大まかな見通しである。

本書ではたくさんのことが論じられているが、最も大きい論点は、「帝国から国民国家へ」という図式への批判である。「帝国」と「国民国家」の間には、つながりや重なり合いがある。「国民国家」は往々にして「帝国のミニチュア」である。また、ナショナリズムはそれだけで帝国を破壊するほど強力だったことはない。ナショナリズムはエリート層やディアスポラのものであって、人民大衆を引きつけることはなかった。それに、第一次世界大戦までのほとんどのナショナリストはネーションの完全な独立ではなく、帝国内の自治を求めていた。第 2 次世界大戦後も、敗北した帝国に代わってアメリカとソ連が支配的な帝國的権力としてあらわれたし、ソ連帝国の崩壊後は、生き残った超帝国たるアメリカが帝国のバトンを引き継いだ。中国とロシアも帝國的な相貌を見せている。

本書のもう一つの主張として、「支配者と被支配者」の関係は対立に特徴付けられるという考えへの批判がある。ほとんどの帝国では、支配者と被支配者は数百年にわたって共存してきたのであり、そこには協力、取引、調整などがあったと指摘されている。

このように論じた上で、国民国家は世界史の終着点ではなく、誰もがポスト国民国家を求めており、帝国は長きにわたってモデルを提供してきたというのが結論となっている。常識的通念への強い批判が特徴的だが、行き過ぎへのいくつかの留保も慎重に付けられて、バランスをとろうとしている。

本書は非常に幅広い対象を取り上げ、それぞれの類型的な差異——特に海外帝国と陸上帝国の差異——を論じているが、そのことにはどんな意味があるだろうか。たとえばソ連だけを取り上げて、それを帝国と見なす場合、「帝国なのだから、こうなのだろう」という安易な一般化に走ったり、あるいは、「他の帝国と違って、非常に特異な帝国だ」と論じることになりやすい。これに対して、本書の観点に立つなら、他の諸帝国と似た面と違う面の双方があるということになり、そうした類似点と相違点を類型的に整理することができる。これは大きなメリットと言えそうである。

もっとも、あまりにも多数の事例を取り上げているため、個々の個所では粗っぽい記述や不正確な個所もある（私の目にはロシアやウクライナに関する不正確さが気になるが、他の分野の専門家からは別の問題が指摘されることだろう）。いくつかの書評を見たところ、斬新な見地に対する絶賛もあれば、通説批判が行き過ぎているという批判もある。論争喚起的な著作である以上、種々の批判があるのは当然だが、問題提起としての意義は大きいように思われる。

20250317

一昨日（15 日）、本多延嘉追悼 50 年の集いという会合が開かれた。本多延嘉とはかつて革命的共産主義者同盟（革共同）書記長だった人で、いまからちょうど 50 年前に革マル派に襲われて落命した。革共同（中核派）という組織はいまでも現存しているが、この集会を組織したのは彼らではなく、かつていろいろな時期に組織から離れた人たちが中心で、他党派や無党派の人にも呼びかけていたようだ（現在の革共同自体は、インターネットで検索する限り、同種の追悼集会を催してはいないらしい）。現役の政治党派の主催でないとはいえ、呼びかけ人の中にはあれこれの政治的思惑を持つ人たちがいるらしく、そういう思惑に引きずられるのは面白くないという気持ちがあって、ちょっと迷ったが、関係者に話を聞いたところ、呼びかけ人たちの考えは多様であり、一つの考えで統一しようという思惑はなく、何十年か前に関わりのあった人たちが高齢者となる中で久し振りに顔を合わせていろいろなことを語りあう場だということだったので、試しに出かけてみることにした。

集会の冒頭で発言した呼びかけ人の岩本慎三郎氏は、呼びかけ人たちの中には、多様でときとして相対立するような考えがあるので、自分は呼びかけ人全体を代表するのではなく、あくまで自分個人としての考えを話すと語った。実際、その後の発言は色とりどりだった。榎（水谷）けい子氏は、組織の中での性暴力について渾身の告発発言を行なった。元ブント赤軍派の高原浩之氏は、赤軍派の武装路線の誤りを念頭におくなら偉そうなことは言えないと断わった上で、中核派および社青同解放派の対革マル戦争が大衆にどのように受け取られたかを総括すべきだと問題提起した。ある人は、本多氏亡き後の中核派はゾンビであり、ゾンビとして長く生き続けているのだと指摘した。関西地方の指導者だった赤松英一氏は、党中央と考え方を異にしつつ組織の中に居続けることを選んでいて、ある時点でそれが限界に達したという経緯を述べた。ジャーナリストの小林哲夫氏は、立花隆の『中核 vs 革マル』のもととなった取材におけるインタビューと本多没後に発表された雑誌記事の間の違いに触れて、この違いはどう理解すべきかと問いかけた。参加者の多くはかつて中核派に属していた人のようだったが、ブント系諸派や社青同系の人たちも含まれていた。

私が運動を離れたのは 1971 年のことであり、当時知っていた人たちと顔を合わせるのは半世紀以上を隔てての再会ということになる。昔の顔を思い出すのが難しかったりして、歳月の経過を思い知らされた。それらの人たちの軌跡も、現在の考えも各人各様であり、時として強い違和感をいだかされたりすることもあり、手放して懐かしいということとはできないが、半世紀前のことを思い出し、（否定面を含めて）反芻するのは、現代史と自分史を考える上でそれなりに有意義な経験だったと思う。

20250328

刊行からちょっと時間が経ってしまったが、鶴見太郎『ユダヤ人の歴史』（中公新書、2025 年）を読み終えた。私は大分以前からユダヤ人の歴史に関心をいただいていた。その最初のきっかけは、今から半世紀前に原暉之の先駆的な論文「近代ロシアにおけるユダヤ人およびユダヤ人問題」（『愛知県立大学外国語学部紀要（地域研究・関連諸科学編）』第 8 号、1972 年）

を読んだことにある。その後、自分自身は手を出さないながらも、野村真理、高尾千津子、長尾広視、赤尾光春、そして本書の著者たる鶴見太郎らの優れた研究が続出したことに触発され、持続的に関心をいじめてきた。外国での研究にはあまり手を出さずにいたが、Yuri Slezkine, *The Jewish Century*, Princeton University Press, 2004 は、読み取りの難しいトリッキーな著作ながら、大きな刺激を受けた（この本については、長文の読書ノートを書いた）。

<https://www7b.biglobe.ne.jp/~shiokawa/notes2013-/Slezkine.pdf>

さて、鶴見の本書は、3000 年に及ぶユダヤ人の歴史を、「主体」と「構造」の組み合わせという観点から多面的に描いている。その舞台は、古代オリエントから始まって、オスマン帝国、イベリア半島、東西ヨーロッパ、ロシア、アメリカ、イスラエルとパレスチナという風に、世界の多くの部分を蔽っている。ある意味では、世界史全体を独自の角度から読み直した本ということもできそうである。私のように高校世界史の勉強から遠ざかって久しい高齢者にとっては、思い出すことも難しい事項がたくさん出てくるが、鶴見はずっと若く、東大教養学部で高校卒業後まもない学生たちと接している関係上、このような題材を取り上げることで、世界史をこう見ることもできるということを教えているのではないかという気がした。

古代から現代に至る本書を通読して、最も印象的だったのは第 2 章（古代末期・中世）と第 3 章（近世）だった。第 1 章の古代は、具体的な内容はあまりよく知らないながら、旧約聖書の世界はこういうものとしてユダヤ人たちに受け取られるのだろうと想定することができた。また、第 4、5 章の近現代は、個々の内容については知らないことが多かったが、とにかくごく大まかにはこういう時代だったのだろうという見当を付けることができた。これに対して、古代末期・中世・近世については、ほとんど空白だった。世界史全体の流れについてもそうだが、ユダヤ人の歴史に関しては一層その観が強い。ユダヤ人の歴史というと、古代における「バビロン捕囚」とディアスポラの始まりが思い出され、そこから長い空白を経て、近代における反ユダヤ主義・ボグロム・ホロコースト、そして現代におけるパレスチナ問題へと飛躍し、その間の時期が抜けているというのが多くの人の感覚ではないだろうか。しかし、その間の時期にもユダヤ人は生きていたし、独自の歴史を持っていた。重要なのは、イスラーム圏とりわけオスマン帝国ではユダヤ教はそれほど強く差別されず、独自の存在を保っていたということである（但し、迫害が一切なかったというわけではない）。本書によれば、7 世紀から 13 世紀までの時期に、世界のユダヤ人の 9 割がイスラーム諸国に住んでいたという。もう一つ重要なのはイベリア半島である。ここもある時期までムスリムが多く、その中でユダヤ人が活躍していた。キリスト教のカステイラ王国やアンゴラ王国の南進によって存続が難しくなったが（1492 年にレコンキスタ完了）、それ以前の時期には、ローマ帝国で発展したギリシャ語による学問の成果をユダヤ人がラテン語やヘブライ語に翻訳してヨーロッパに伝えていた。つまり、彼らはイスラーム世界とキリスト教世界の橋渡し役を演じたということになる。その後、スペインのユダヤ人の多くは追放され、ポルトガル、オランダ、オスマン帝国などの各地に独自のディアスポラを形成した。アムステルダムで最も有名なユダヤ人がスピノザだという（ここで、最近読んだ吉田量彦『スピノザ——人間の自由の哲学』講談社現代新書、2022 年を思い出した）。

本書はユダヤ人を対象としているとはいえ、ユダヤ人——そして、周囲の人々の彼らへの

まなざし——を一枚岩的に捉えているわけではない。イスラーム圏でも迫害がなかったわけではない一方、ユダヤ人差別が顕著だったキリスト教圏でも、常に同じ形で差別が続いていたわけではない。ユダヤ人の対応も多様であり、同じ行動様式が続いていたわけではない。著者の専門の一つであるシオニズムについても、必ずしも全員がパレスチナに行くことを目指すものではなかったことが指摘されている。このような多様性を押さえることは、史実を尊重する上で重要な点である。もっとも、対象にあまり通じていない読者にとっては、あまりにもいろんなことが描かれていて、見通しが付けにくいという不満をいだくおそれがあるような気もする（対象の性格からして、やむを得ないことではあるが）。「むすびに」では、ユダヤ的なものの程度や他の側面との絡まり方は個々に異なるとして、ゼレンスキー、ネタニヤフ、ケイガン（米最高裁判事）の3人が取り上げられている。この3人は、ウクライナ、イスラエル、アメリカの人という意味では大きな流れを象徴する意味があるが、各人ごとの個性差があまりにも大きく、「だからどうなのか？」という疑問を残しかねない。そういう不満はあるものの、とにかくこの重要主題について長期的な通史を描いたことの意味は大きい。現代では、一方においてホロコーストの被害者という強烈なイメージがあり、他方では、その彼らがパレスチナに対してジェノサイド的政策をとっているのはどうしてかという疑問が多くの人に取り憑いている。そういう状況の中で堅実な歴史書が出たことには大きな意味があるだろう。